

子規の滑稽俳句を探る その三

藁目良雨

一読して滑稽味の感じられる子規のその他の俳句を上げてみよう。

夏瘦や枕にいたきものゝ本 子規

押しかけて余所でめしくふ秋のくれ 子規

雲助の鞆丸黒き櫓火かな 子規

みちのくへ涼みに行くや下駄はいて 子規

夕飯の向ふに見ゆる青田かな 子規

行水や美人住みける裏長屋 子規

盗人の暦見て出る恵方かな 子規

葎剪つて酒借りに行く隣かな 子規

蠅憎し打つ気になればよりつかず 子規

蚊を打つて軍書の上に血を印す 子規

雪の絵を春もかけたる埃かな 子規

このように直接的に面白さを感じる句がある一方で、隠し味の面白さがある滑稽俳句が子規にはある。次の句はどうだろうか。

歩けなくなった子規が明治二十九年の春にリウマチの専門医師から原因はリウマチではなく他の病気であること告げられもう一生歩けないことを覚悟したときの句に

われ老いぬ春の湯婆維摩経 子規

がある。句意は、歩けなくなった自身を見て「老人になってしまった私の友は、春の湯婆と維摩経だけだ。愚痴は言うまい。」と言っている。「維摩が病気になった時、釈迦が舍利弗・目連・迦葉などの弟子達や、弥勒菩薩などの菩薩に見舞いを命じた。しかし、みな以前に維摩にやりこめられているため、誰も行こうとしない中、文殊菩薩だけが見舞いに行き、維摩と対等に問答を行い、最後に維摩は生死をも含めた究極の境地を沈黙によって示した」という故事を踏まえて鑑賞しなければならぬ窮屈さがあるにしても二十九歳の若者が自身を老人であると滑稽視している点や、湯婆の「ゆ」と維摩経の「ゆ」を語呂合わせしているところなどは、絶望の淵にいる病人のなせる技ではない。

究極の時点で自己を諧謔視できる子規の凄さは絶筆三句を見ても判る。死の前日に書かれた絶筆三句を、書かれた順番に鑑賞してゆくと味わい深い。

糸瓜咲て痰のつまりし仏かな 子規

痰一斗糸瓜の水も間にあはず 子規

をととひのへちまの水も取らざりき 子規

先ずはじめに、痰壺に痰を吐きだす力がなくなって反古で拭い取ってもらいながら、「糸瓜の花が咲く季節に、喉に痰を詰まらせた馬鹿な病人が一人いるなあ」と嘆き、「痰がこれまでに一斗も出たのに糸瓜の水は間に合わなかったなあ」と嘆きは続く。「ああそう言えばおとといの糸瓜の水も取って飲まなかったがこれは大失敗であったことよ」と最後は、自分に苦笑している子規である。

意識の薄れてゆく中に立ち登ったのは子規の諧謔という本質であった。

(完)